

政治参加が若者に与える影響の調査の試み

—衆議院総選挙におけるボランティアを対象として—

The Trial of Research about Political Participation of Youth

-Focused on the Youth Volunteer in the Lower House Election-

福嶋 俊¹⁾

Shun FUKUSHIMA

本研究は、選挙活動の経験が、若者の政治への意識・態度にどのように影響を与えているのかを考察していくとともに、政治参加経験をした若者の意識の変化から、今後の政治に関する教育のあり方について展望するものである。そのため、筆者が第46回衆議院総選挙において候補者となったある人物の選挙事務所において参与観察を行うとともに、選挙活動に参加した若者に対して、半構造化面接を行った。その結果、1) 政治と選挙は違うとの共通認識をボランティアがもつこと、2) 当初の目的とは異なっているにもかかわらず、選挙における目的をみつけて活動を続けていることがわかった。また、調査対象者へのインタビューの中で「政治家になりたい」と答えたものはいない。「政治の世界をみたものが政治の世界に憧れるような環境」や「政治の仕組みだけでなくその中で働くことの意味」など、政治に関する取り組みや教育も、今後進めていく必要があるだろう。

キーワード：選挙、政治教育、社会科教育、公民教育

1. はじめに

近年、世界では情報技術が発達し、それによって社会がめまぐるしく変化をしている。

例えば、メディアは大きな変化の過渡期にある。従来はテレビやラジオなど、情報の送り手から受け手という関係性が固定されているメディアが主流であったのに対し、近年ではインターネットのように、情報の送り手と受け手が入れ替わる双方向性をもったメディアが台頭してきている。それによって、これまでよりも明らかに情報発信のコスト、障壁は下がってきている。メディアの世界は変化してきているのである。

一方で、政治の世界を見ると、情報技術の発達に政治の世界が追いついていないように思われる。特に、選挙区で区切られた選挙を戦う場合、特定の選挙区に対する広報が重要となる。そのため、選挙の時には、朝から駅に立ち挨拶をし、昼間には選挙カーで区内を走り回っておなじみのフレーズを並べ、夜も駅に立って挨拶運動をする候補者が続出する。

インターネットが発達し、社会構造や情報伝達の手法

が変化しているにもかかわらず、選挙は数十年前と同様の形式で行われているのである。選挙の業界は、古い形式が重んじられている世界であるといえよう。

一方で、若者が選挙に参加することは重要である、という指摘はよくなされている。特に、近年、若者の投票率が減少していることから、若者の投票率をあげることの重要性が様々なところで叫ばれている。(参考：表1)

表1 衆議院総選挙における年代別投票率推移

年代	20歳台	30歳台	40歳台	50歳台	60歳台	70歳～
第36回	63.1	75.9	81.9	85.2	84.8	69.7
第37回	54.1	68.3	75.4	80.5	82.4	68.4
第38回	58.9	72.2	78.0	82.7	85.7	72.4
第39回	57.8	76.0	81.4	84.9	87.2	73.2
第40回	47.5	68.5	74.5	79.3	83.4	71.6
第41回	36.4	57.5	65.5	70.6	77.2	66.9
第42回	38.4	56.8	68.1	72.0	79.2	69.3
第43回	35.6	50.7	64.7	70.0	77.9	67.8
第44回	46.2	59.8	71.9	77.9	83.1	69.5
第45回	49.5	63.9	72.6	79.7	84.2	71.1

¹⁾ 千葉大学大学院教育学研究科修士課程
Graduate School of Education, Chiba University

若者が選挙で投票することは、疑うべくもなく重要で

あるが、政治参加には様々な方法がある。例えばデモ活動やロビー活動など、ある特定の 이슈の解決にむけた活動で成果をあげている例もある。これらの活動には実際に多くの若者も関与している。

ただ、間接民主制がとられている日本では、選挙で代議士を選ぶという仕組み自体はなくなる。そして、選挙には多くの支援者が必要である。候補者の視点で見れば、そういった地元の支援がなければ当選はおろか、まともに選挙戦を戦うことすら難しいのが選挙なのである。

そこで、本研究では、あまたの政治参加の方法の中でも選挙に焦点をあてる。前述したように、選挙活動が時代の波に乗り遅れているという意見がある一方で、選挙には人が必要となる。本稿では、若者が選挙という場の中で、どのように活動に適応していくのか、また、活動を通じて若者の政治に対する考え方に変化があるのかどうかを検証していく。

政治不信と呼ばれる時代が続く中で、選挙に関わる若者が何を考え、何を感じ取ったのか。それは、今後の政治教育のあり方を考えていく上での大きな示唆を与えてくれるだろう。

2. 研究の目的と方法

2.1. 研究の目的

本研究の目的は、選挙活動の経験が、若者の政治への意識・態度にどのように影響を与えているのかを考察していくことである。さらには、その政治参加経験をした若者の意識の変化から、今後の政治に関する教育のあり方について考察して行きたい。

2.2. 研究の方法

筆者が選挙活動現場での参与観察を行うとともに、選挙活動に参加した若者に対し、30分程度の半構造化面接を行った。この調査対象者は、いずれも、第46回衆議院総選挙において候補者となったある人物(以下:A)の事務所において、ボランティア活動を行っていたものである。調査対象者のプロフィールは以下のとおりである。

表2 調査対象のプロフィール

名前	性別	年齢	職業	参加年数
B	男	22	学生(文学)	1年4ヶ月
C	男	34	フリーター	8ヶ月
D	女	22	学生(教育学)	9ヶ月
E	女	20	学生(法学)	5ヶ月

本インタビューでは、政治観・候補者に対する感情・活動を通しての感想などについて、回答に応じてランダムに質問していった。ここで集計されたインタビュー結果と、筆者の参与観察をもとにして、政治活動を通じた若者の変化を描いていく。

3. 調査結果の分析

3.1. 分析の視点

調査結果の分析にあたり、分析の視点を示しておく。本稿の目的は、「選挙活動の経験が、若者の政治への意識・態度にどのように影響を与えているのかを考察していくこと」である。そのため、インタビューの中から、1) 元々の政治関心、2) 政治への意識の変化、3) 活動に対する思い、以上の3つに関連するコメントを抽出して分析を進めていく。

3.2. 調査結果の分析

まず、それぞれの対象者がどのように政治活動に参加したのかを確認しておきたい。B・C・D・Eそれぞれの活動動機と経緯は、表3のとおりである。

表3 調査対象者の活動動機・経緯

対象者	活動動機・経緯
B	<ul style="list-style-type: none"> 友人に誘われる形で活動に参加。活動を1年半続け、「楽しかった。辞めたいと思ったことはない。」と語る。 もともと政治活動のイメージはなんとなくではあるがあった。 「政治はちょっと…という若者は多いが自分には違和感はなかった」
C	<ul style="list-style-type: none"> もともと候補者と関係があり、その縁で活動を手伝うことになる。 薬事法などに興味があり、医学の世界にも明るい候補者のもとで活動したいと考えていた。政治にも関心があった。
D	<ul style="list-style-type: none"> 友人の紹介で事務所にくるようになった。面白そうだと感じた。 もともと、いろいろな活動に参加したいと思っており、興味ないことでも色々やってみようと考えていた。 学校外の活動に参加することが多く、政治活動以外にも、アルバイト含め様々な活動をしている。
E	<ul style="list-style-type: none"> 「新しいコミュニティに所属することへの抵抗感が全くない。政治の世界でも問題なかった。」と語る。友人の紹介で事務所にくるよう

	<p>になった一人。</p> <p>・「すべての活動が候補者のためになる。人の役に立っている感覚があった。もともと、選挙が終わるまでは手伝おうと考えていた。」</p>
--	---

それぞれの活動動機を見ると、はじめの経緯は友人の誘いであったり、候補者からの誘いだったり、「他者からの勧誘」ばかりである。自ら政治の世界に来たというものはいないが、一方で、それぞれ政治に対しての考えはもっている。

例えば C であれば、薬事法を改善すべきだと考えているし、E は、大学で政治系の授業をとることが多いと付け加えた上で、「TPP（環太平洋戦略的経済連携協定）はいいとは思わない。AEAN など、別の枠組みで経済連携すべきだ」と話すなど、政治に対してある程度の知識をもち、かつ自分の意見をもっている。

3.3. 選挙活動に対する考え方

3.2.で紹介した調査対象者が実際に政治活動として行ったことは、駅頭活動・電話かけ・ポスター貼りなどである。彼・彼女らは、これらの活動に対してどのようなイメージを持っていたのだろうか。C は、自身が活動してきたことに対して以下のように語っている。

（選挙は）古い手法を使っていると思った。もっと、政策で訴えろと思っていたが、実際の選挙ではネットワークが重要。多くの人は雰囲気流されるので、その人達を味方につけるにはどうしたらいいかという事を考えようと思った。

実際、C は野田佳彦元内閣総理大臣が衆議院の解散を宣言した 11 月 17 日以降、毎日のように駅頭活動を行っていた。ボランティアの中でも、ひときわ、真面目に活動に取り組んでいた一人である。

彼は、「解散以降スイッチが入った」と語る。理想の政治の世界に対する幻想を抱きつつも、選挙の手法に適応していった様子がみとれる。

しかし、C 以外は選挙活動に対して違った見方をしている。B は、選挙活動はイメージ通りであったという上で、「今までやられていることはなんとなく知っていたからギャップはなかった」と語っている。一方で、D、E は、活動について全く知らなかったので「こんなものかと思った」と語っているのである。

その点では意見が異なる三者であるが、三人の意見で共通しているのが「政治と選挙は違う」という感覚である。E は政治と選挙の違いについて、以下のように述べている。

選挙と政治は違う。選挙は地盤の強さで決まるから、地元まわりをどれくらいやったかが大事。（選挙の能力と）政治家の能力とは関係がない。

本当に政治家としての力と選挙の力が別物なのかという疑問が残るが、その論考はここでの主旨ではない。この話題は別の機会に譲るが、三人が選挙の独自性について語っていることは興味深い。B は選挙活動の様子について、独特の比喩を用いて語っている。

票を稼ぐのが第一歩。（リースのコピー機の営業マンを例に出しながら）自分は商品売っている営業マンのような気持ちだった。A 候補者という商品をうるのが仕事。とにかく、今出来る範囲で営業するしかない。

事前のイメージがあるにせよないにせよ、彼ら・彼女は自身の言葉で選挙とは何かを語っている。そして、選挙の世界の特殊性を理解した上で、その世界の中で成果をあげるために何をすべきかに考え方をシフトさせていくのである。

4. 考察とまとめ

この調査対象者に、今後の政治との関わり方について尋ねた。その中で、政治家になりたい、と答えたものはいない。関係者の誰かが選挙をするのであれば、ぜひ協力はしたいとは言いが、自分からアクションを起こすことはないと答える。

これまで、日本の教育では多くの場面で投票者としての教育が行われてきた。社会科での政治に関する学習の中心は、議会制度の仕組みや選挙制度の仕組み（ハードウェア）である。その中身（ソフトウェア）について勉強する機会は少ない。

しかし、実際に国を動かしているのは、「人」である。議員はもちろん、選挙スタッフ、政策スタッフ、官僚、研究者、など、様々なアクターが知恵を絞って政治を司っている。よい社会を作るのであれば、その担い手を育てる必要がある。

「だから政治についてもっと教える機会を作るべき」というのは簡単であるが、政治について理解できる機会を増やす必要があるだろうし、また、政治の世界もより憧れられる世界となるべく努力していく必要があるだろう。